

霞ヶ浦の水の問題は、私たちの生活とぬききしならぬ重大な係り合ひを持っています。その水が日々汚れつゝあり、他方では、着々と「水がめ化」が進行しています。「いったい、これから五年後、十年後には、霞ヶ浦はどうなってしまうのか。」

次の二つの論文はこのような私たちの不安と疑問に包まれた湖の将来を考える一助になるに違いありません。

常陸台地と霞ヶ浦

須藤清次

わたし達の住む茨城県南部の地盤にかかわる大活断層があるということが、五月二十二日に資源調査会により発表された。茨城県は地震が多く、神社ではよそではめづらしい耐震のお守札がつくられている。断層は地震のもとであるからわたし達をびくりさせたのであるが、専門の地質学者も別の意味で驚きであったようだ。人工

衛星の撮った空中写真によるリモートセンシング（遠隔探査）で、地下の断層の発見ということは、地質学の方法からはかけはなれたものであったのであろう。

土浦周辺の地質についてはわたしのよきな農業土木の関係者にも関心をひくので、地質と土木の関係したことについて少し考えてみたい。

霞ヶ浦周辺の地層

いま地球の極地方の氷が融けると海面が六六米も上昇するといふ。人類が活動をはじめたこの数十万年の間においても、氷河が発達して地球上の水が地上にとどまり海面が一〇〇米前後も下がった時期が四回あった。その氷期と氷期の間には逆に海面上昇が起こる。第三間氷期と推定されるときに、関東平野の大部分は海面下に没し古東京湾ができた。古東京湾に堆積した土層が海退により浮上したものが霞ヶ浦周辺の標高は二・三米の常陸台地である。

台地を切つて霞ヶ浦があり、さらに多数の平行線状の各津田が並んでいる。桜川は各津田の一つともいえるし霞ヶ浦の延長ともいえよう。これらの沼や川の成因はリモートセンシングでついで調べてみたいところである。